

世界に広がる
リュートの仲間

弦の路

みち

平成14年10月12日(土)~12月8日(日)

後援／埼玉県・埼玉県教育委員会

会場／狭山市立博物館

〒350-1324 埼玉県狭山市稻荷山1-23-1

狭山稻荷山公園（ハイドパーク）内

TEL.042-955-3804

FAX.042-955-3811

R100

古紙配合率100%
再生紙を使用しています。

開催にあたって

～リュートという弦楽器をみたことがありますか？～

そして、その可憐で美しい響きを　きいたことがありますか・・

西アジアを代表する弦楽器の「ウード」は、西洋梨を縦に割ったような胴を持った楽器です。ウードは＜楽器の女王＞とよばれ、ササン朝ペルシア時代の弦楽器をその祖としています。ウードは西洋に伝えられ「リュート」となり、また東に伝えられて「琵琶」となったといわれています。

秋の企画展は、博物館を訪れて下さった皆様に、こうした「リュートの仲間」の楽器から、文化の広がりと各民族の工夫のさまを、楽器の形の美しさと音を楽しみながら見て感じていただく展覧会です。

21世紀は、世界中の民族に対する広い視野をもち、異文化を尊重しつつ相互に理解し合うことが重要な世紀になることだと思います。

こうした、世界情勢の中にあって、いま日本の音楽教育の中にも、民族楽器や和楽器の学習が大きくとりあげられ、地球の各地に暮らす人々に子供たちの新鮮なまなざしが向けられようとしています。

さあ、あなたも、博物館で「弦の路」をたどる世界旅行をしてみませんか？

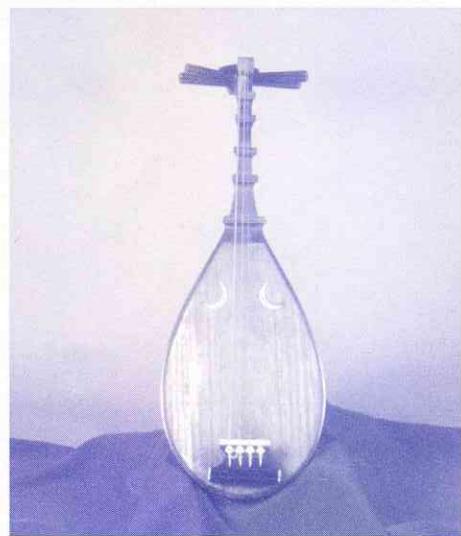
きっと、小さな発見があることだと思います。

本企画展の開催にあたり、狭山市在住の、つのだたかし氏、マリオ鈴木氏、豊泉秀記氏　国立音楽大学楽器学資料館をはじめご協力いただきました関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げます。

狹山市立博物館



ウード



筑前琵琶
つのだたかし氏藏

おしゃべり コンサート

常味裕司　ウードコンサート	10月26日(土) 13:30～15:00
マリオ鈴木　ギターコンサート	10月27日(日) 13:30～15:00
つのだたかし　リュートコンサート	11月17日(日) 13:30～15:00

●申込は不要です

インフォメーション

- 開館時間 午前9時～午後5時
- 休館日 10/15、21、25、28
11/5、11、18、22、25
12/2
- 入館料 一般/150円(100円)
高校生・大学生/100円(60円)
小学生・中学生/50円(30円)
小・中・高校生/土曜日は免除(無料)
※()内は20名以上の団体
- 交通
 - 西武池袋線「稻荷山公園駅」から徒歩3分
 - 西武新宿線「狭山市駅」西口からバス(稻荷山公園駅行)終点徒歩3分
 - 圏央道狭山日高インターより15分(5km)



世界に広がる
リュートの仲間

弦の路

みち



後援／埼玉県・埼玉県教育委員会

平成14年10月12日(土)～12月8日(日)

狭山市立博物館

開催にあたって

●リュートという弦楽器をみたことがありますか？

●そして、その可憐で美しい響きをきいたことがありますか…

西アジアを代表する弦楽器の「ウード」は、西洋梨を縦に割ったような胴を持った楽器です。ウードは＜楽器の女王＞とよばれ、ササン朝ペルシア時代の弦楽器をその祖としています。ウードは西洋に伝えられ「リュート」となり、また東に伝えられて「琵琶」となったと言われています。

秋の企画展は、博物館を訪れて下さった皆様に、こうした「リュートの仲間」の楽器から、文化の広がりと各民族の工夫のさまを、楽器の形の美しさと音を楽しみながら見て感じていただく展覧会です。

21世紀は、世界中の民族に対する広い視野をもち、異文化を尊重しつつ相互に理解し合うことが重要な世紀になることと思います。

こうした、世界情勢の中にあって、いま日本の音楽教育の中にも、民族楽器や和楽器の学習が大きくとりあげられ、地球の各地に暮らす人々に子供たちの新鮮なまなざしが向けられようとしています。

さあ、あなたも、博物館で「弦の路」をたどる世界旅行をしてみませんか？きっと、小さな発見があることだと思います。

本企画展の開催にあたり、狭山市在住の、つのだたかし氏、マリオ鈴木氏、豊泉秀記氏、国立音楽大学楽器学資料館をはじめご協力いただきました関係各位に厚く感謝とお礼を申し上げます。

平成14年10月 狹山市立博物館

●凡例

1. 本書は平成14年10月12日から12月8日までを会期とする企画展「弦の路－世界に広がるリュートの仲間－」のパンフレットである。
2. 図版は展示資料の一部であり、図版掲載と展示の順序は必ずしも一致していない。また、展示資料は会期中に展示替えをおこなうため期間によっては展示されていない場合がある。
3. この企画展は、石川友子・小渕良樹・大谷武志が担当した。

●参考文献

- 1.『音楽大辞典』全6巻 平凡社 1981～1983年
- 2.『新訂標準音楽大辞典』音楽之友社 1991年
- 3.『図解世界楽器大事典』黒沢隆朝著 雄山閣出版 1994年
- 4.『浜松市楽器博物館所蔵楽器図録 II ヨーロッパの弦鳴・体鳴・膜鳴楽器』浜松市楽器博物館編 浜松市楽器博物館 1995年
- 5.『浜松市楽器博物館所蔵楽器図録 IV 日本の楽器』浜松市楽器博物館編 浜松市楽器博物館 1995年
- 6.『KALEIDOSCOPE I』武藏野音楽大学楽器博物館編 武藏野音楽大学 1996年
- 7.『ペルシアの楽器』(浜松市楽器博物館第4回特別展図録)浜松市楽器博物館編 浜松市楽器博物館 1997年
- 8.『音のデザイン 楽器とかたち』INAX出版 1998年(INAXブックレット)
- 9.『民族楽器大博物館』若林忠宏著 京都書院 1999年(京都書院アーツコレクション)
- 10.『楽器』ダイヤグラムグループ編 マール社 2000年
- 11.『黒船来航と音楽』笠原潔著 吉川弘文館 2001年(歴史文化コレクション)
12. クレーンホームページ(鶴田誠氏のホームページ) <http://www.crane.gr.jp/>

弦楽器とリュートの仲間

「弦楽器」とは、糸を張って、指ではじいたり、弓でこすったりして音を出す楽器のことです。弦楽器は、音の出し方によって3種類に分けられます。

弦を指やバチではじくものを「撥弦楽器」といいます。ヴァイオリンやチェロのように弓を使って弦をこするものを「擦弦楽器」といいます。そして、ピアノのように、弦をハンマーでたたいて音を出す楽器のことを「打弦楽器」といいます。

弦楽器は、狩猟の弓から作られたと言われます。動物をとるための道具である弓を指ではじくと、よい音や、ふしぎな音がしたので、わたしたちの先祖は、弦楽器を考えついたのでしょうか。

今回の企画展では、弦楽器のうち「リュート属」に入る楽器を展示します。

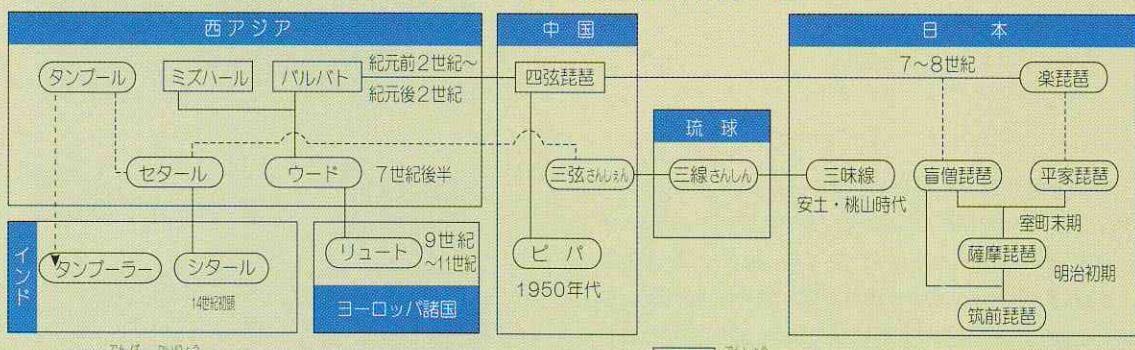
「リュート属」とは、棹(ネック)と胴をもった楽器の仲間を言います。

「リュート属」の楽器は、ウード、リュートのほかに地球上のあちらこちらに、仲間の楽器があります。たとえば、ロシアの「バラライカ」、アメリカの「バンジョー」、日本の「琵琶」「三味線」などです。こうした、リュートの仲間の広がりは、長い時をかけて多くの人々の手によって伝えられたものにはかなりません。

そして、音楽の広がり方を考える時、忘れてならないことが「音楽は人間の生活を取り巻く環境からさまざまな影響を受けていく」ということです。各民族が自分たちの置かれた気候・風土の中で工夫を重ね、他の民族から伝えられた楽器を身近な材料を使って演奏しやすく好きな音が聴けるように変えてきました。こうして表情豊かなリュートの仲間の楽器は世界中に広がっていったのです。

下表は、西アジアで生まれたリュートの仲間がどのように伝えられていったのかをたどったものです。展示室に楽器の実物が展示されていますので、この表を参考にしながら、形と音をお楽しみ下さい。

■ リュートの仲間の伝わり方 ■



●ご協力いただいた方々

本企画展の開催およびパンフレットの作成にあたり、次の方々や機関にご協力を賜りました。
心よりお礼を申し上げます。（五十音順、敬称略）

神奈川県立歴史博物館
国立音楽大学楽器学資料館
埼玉県立総合教育センター
埼玉県立民俗文化センター
松明堂音楽ホール
浜松市楽器博物館

民音音楽資料館
武蔵野音楽大学楽器博物館
リュートの会
ロバの音楽座・カテリーナ古楽合奏団

石嶺伝光
江田 修
笠原 潔
立川叔男
常味裕司
角田圭子

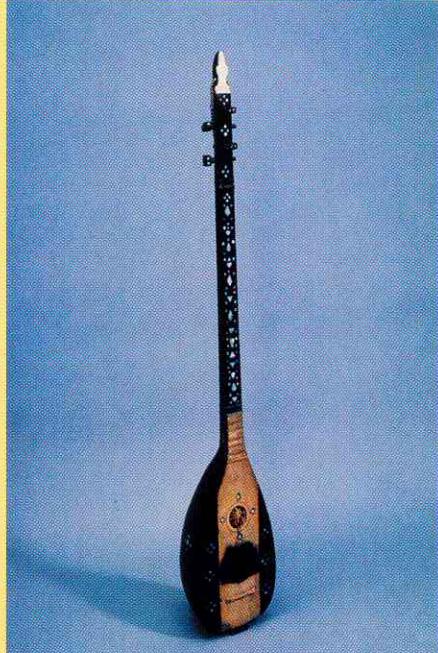
つのだたかし
豊泉秀記
中山 昇
西野春平
平野道之
マリオ鈴木

宮崎昌美
山下暁彦

リュートの仲間の流れをたどって

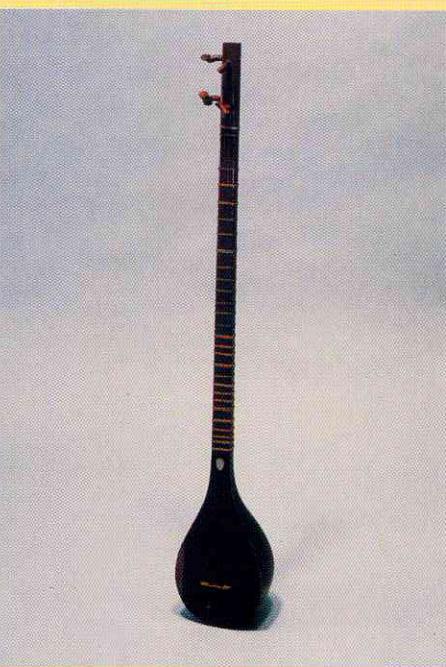
●タンブルの胴は、桑の木を素材にした「寄せ木細工」で作られています。弦は3本です。指ではじいて演奏します。ペルシア音楽や、民族音楽に使われます。

◀国立音楽大学楽器学資料館 藏▶



●セタールは西洋梨型の胴と、細長い棹の4弦の楽器です。セタールの胴は、タンブルと同じ「寄せ木細工」で作られています。イランやトルコなど西アジアの国では、こうした長い棹をもつ撥弦楽器が多く見られます。ペルシア語で「セ」は「3」、「タール」は「弦」の意味です。もとは、3弦の楽器でしたが、20世紀の初めに4弦になりました。ペルシア音楽の独奏や歌の伴奏に使われます。

◀国立音楽大学楽器学資料館 藏▶



西アジアからヨーロッパ・西アジアから日本



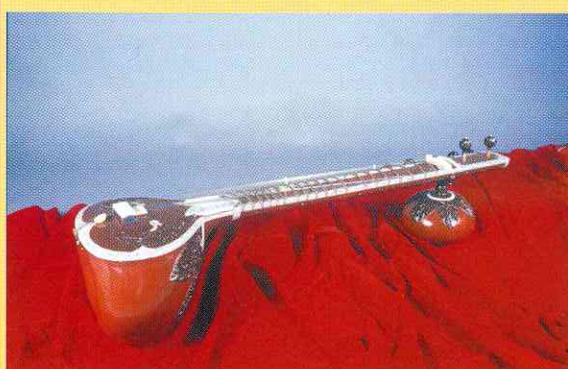
●古典音楽の伴奏楽器として用いられます。木製または瓢箪製の胴にフレットの無い長い棹がついています。ふつう弦の数は4本で、演奏は、指で順番に弦をはじいて、音をとぎれることなく鳴らし続けます。この「ドローン」とよばれる持続音はインド音楽に欠かすことのできないもので演奏は比較的簡単ですが、つねに正しい音程を保つことに気を使わなければなりません。

◀国立音楽大学楽器学資料館 藏▶



タンブーラー
(インド)

ambura



●北インドの代表的な撥弦楽器です。胴は、半分に割ったかんぴょうの実に木製の表板を張り合わせて作ります。弦は、金属製で演奏に用いられる7本のほかに、10～12本の共鳴弦が張られています。棹には16～22個の移動のできるフレットが取り付けられています。針金で作られた爪を右手の人指し指につけて弦をはじきます。弦をおさえる左手の指は滑らせるように演奏しますが、ヤシの油を塗る場合もあります。

◀マリオ鈴木氏 藏▶



シタール
(インド)

sitar

●西アジアでは「楽器の女王」とよばれている撥弦樂器で、独奏だけでなく、歌の伴奏や合奏まで幅広く使われます。棹にフレットは付けられておらず、胴は精密な「寄せ木細工」によって作られています。ササン朝ペルシア時代の弦樂器「バルバト」が起源で、このバルバトが東西に伝わり中国や日本の琵琶、ヨーロッパのリュートになったと言われています。

◀つのだかし氏 藏▶



ウード
(西アジア)

d



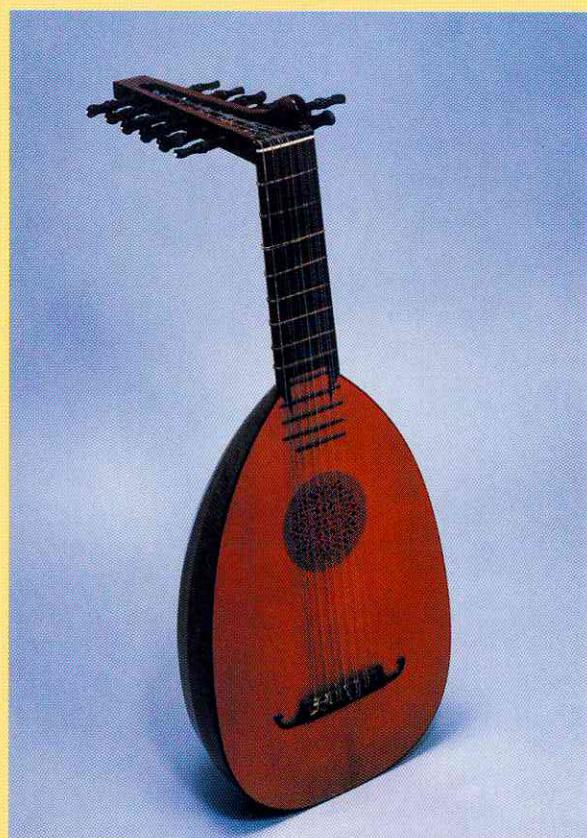
●リュートは、中世から18世紀にかけてのヨーロッパで人気のあつた樂器です。ルネサンス期にはヨーロッパのほぼ全域に普及し、家庭でも演奏されて当時の花形樂器となり、舞曲や歌曲の伴奏にも用いられました。リュートはイスラム教徒、サラセン帝国のスペイン支配の時代を経てヨーロッパに伝えられたと言われます。胴の形は、表板が平らで、裏側が洋梨を半分に割ったようになっています。糸倉のある棹の頭部は折れ曲がり、ネックには7~10個のフレットがついています。指で弾きます。弦は複弦で、6~13コース張られています。

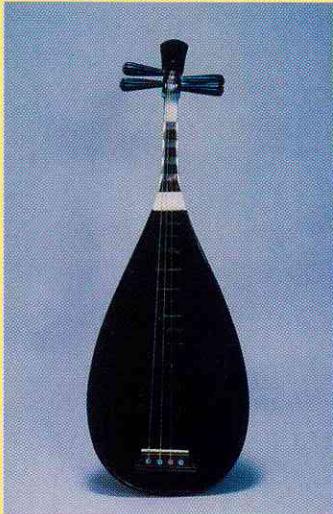
◀国立音楽大学樂器学資料館 藏▶



リュート
(ヨーロッパ)

lute





●中国に伝わる代表的な撥弦樂器です。1950年代に行なわれた民族樂器の改良運動のさいに大きく変貌しました。現在は4本の金属弦を持ち、棹と胴面に25個のフレットがついています。胴は1本の木材(紫檀など)をくりぬいたものに表板を張り合わせて作られます。日本の琵琶と違い、爪か義甲で弦をはじいて演奏します。

●写真は、中国で一般的に使われているより古いタイプで、福建省など中国南部や台湾で演奏される南曲という音楽の合奏で使われます。

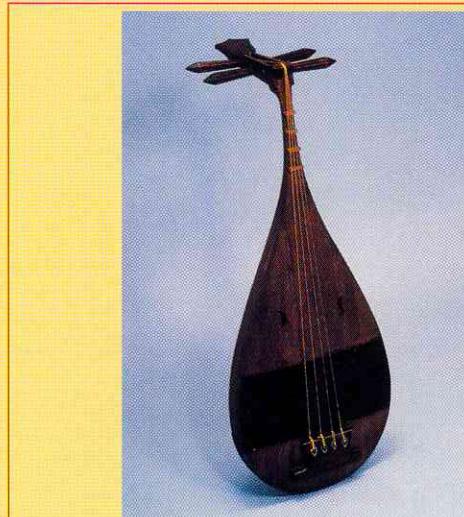
◀国立音楽大学樂器学資料館 藏▶



●今日の日本では、「楽琵琶」のほか「盲僧琵琶」「平家琵琶」「薩摩琵琶」「筑前琵琶」の5種類の琵琶が用いられています。これらすべてが、曲った棹と洋梨型の胴を持ち、撥で演奏されます。

●楽琵琶は雅楽で用いる琵琶です。日本の琵琶では、もっとも起源が古く、奈良時代までさかのぼります。現在、雅楽の中での楽琵琶は旋律を担当するものではなく、リズム樂器として使われていますが、かつては、独奏曲が輸入されたこともあります。

◀国立音楽大学樂器学資料館 藏▶



●室町時代末期に生まれ、武士階級に人気のあった琵琶です。薩摩藩の島津忠良が武士の気持ちを高めるために薩摩琵琶の伴奏で歌を歌わせたのがはじめと伝えられています。江戸時代には、町人も演奏するようになり、明治以後は全国に広りました。写真は3弦ですが通常は4弦です。

◀国立音楽大学樂器学資料館 藏▶



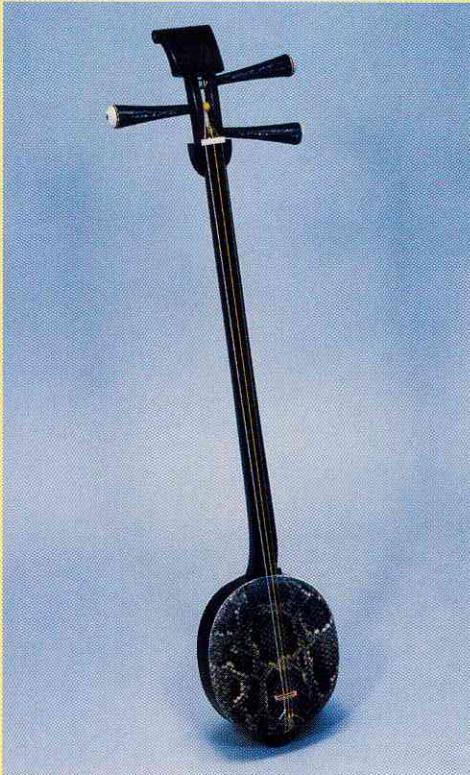
●三弦さんしんは中国が元とよばれていた13~14世紀頃に生まれ、その後、琉球りゅうきゅう(現在の沖縄)に伝わり、三線となり、16世紀なかば頃に日本に伝わって「三味線」さんみせんになったと言われています。胴にはヘビの皮かわが張られ、3本の弦は絹製でそれぞれ太さが違います。演奏には撥はくは用いず、指か義甲ぎこうをつけて演奏します。

◀ 国立音楽大学楽器学資料館 藏 ▶



三弦
(中国)

anxian



●日本の三味線は、胴に猫や犬の皮が張られ撥で演奏されます。これは日本で最初に三味線を手にした人たちが、琵琶法師であつたため撥を使うほうが弾きやすかったからだと言われています。現在のような三味線の形は、江戸時代に完成されたものです。現在使われている三味線は、おもに竿の太さによって「細棹・中棹・太棹」に分けられます。細棹と中棹はおもに歌の伴奏に、太棹は文楽の伴奏や津軽三味線などに使われています。

◀ 国立音楽大学楽器学資料館 藏 ▶



三味線
(日本)

amisen

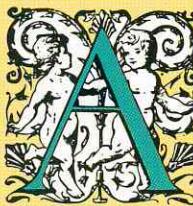


世界のリュートの仲間たち



●アーチリュートは17世紀初め頃に考案されたリュートの仲間の楽器です。主に歌や器楽の伴奏に用いられ、弦長を長くすることによって豊かな低音域を得ることができました。その長い棹に弦を張った姿が弓に似ていることからアーチリュートと呼ばれました。

◀つのだかし氏 藏▶



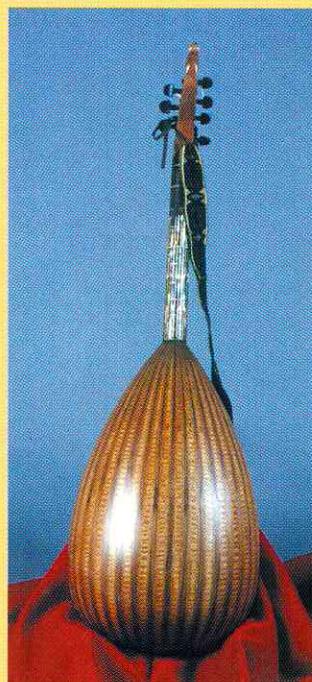
アーチリュート
(ヨーロッパ)
arch lute

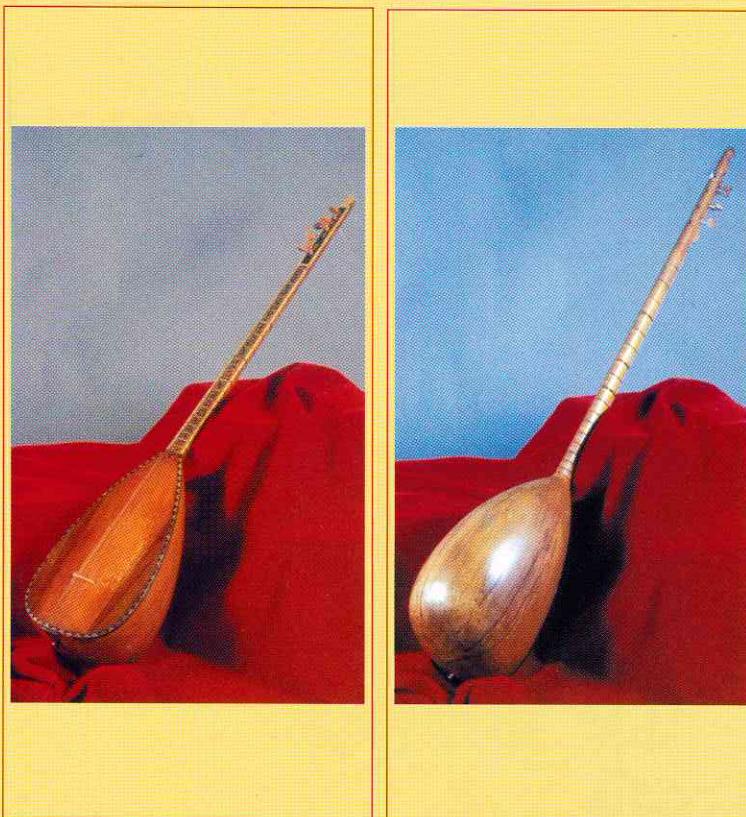
●ギリシャのラウト、ブズーキやトルコのサズと同じく棹の長いリュートの仲間(棹長リュート属)の楽器です。5対の弦を持ち、フレットは糸で結ばれていて、動かすことができます。

◀つのだかし氏 藏▶



ラウタ
(トルコ、マケドニア地方)
aута





●トルコの民族音楽に使われる撥弦楽器です。
さざんかく ゆうし じん ひ
とりわけアーシュクと呼ばれる吟遊詩人が弾き語りをするときに用います。サズはペルシア語で「樂器」を意味しますが、トルコでは細長い棹を持ち、桑材をびわの実の形にえぐって表に松材の薄い板を張った共鳴胴をもつリュートのことをさします。

●通常、弦は金属弦で3コースの複弦が張られ、テゼネと呼ばれる小さな撥でかき鳴らされます。

◀つのだかし氏 藏▶



●16世紀にスペインで栄えたギターの一種です。
どく さか
胴はギターのように、かるく中央がくびれています。また、背は平らでリュートのようなふくらみはありません。ビウエラには弓を使って演奏するもの(デ・アルコ)、ブレクトラムを使用するもの(デ・ベニョラ)、指ではじくもの(デ・マーノ)があり、指ではじくものが最も普及しました。ビウエラは主として上流社会で育まれましたが、ギターが盛んになるにつれて忘れられていきました。

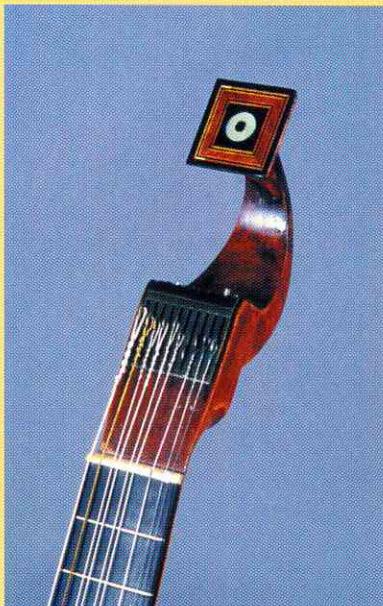
◀つのだかし氏 藏▶





イングリッシュギター
(ヨーロッパ)

English guitar



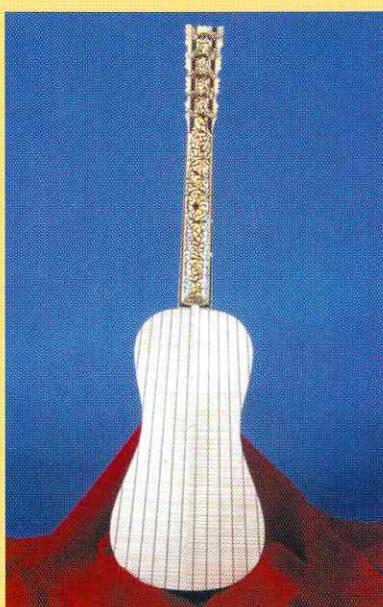
●1750年頃から1810年頃までイギリスなどで流行した小型の楽器です。フレットは金属でブレクトラム(ピックのようなもの)でかき鳴らします。ヨーロッパで16世紀に発展し、普及したシターンがイングリッシュギターへと変化していきました。

◀つのだかし氏 藏▶



バロックギター
(ヨーロッパ)

Baroque guitar

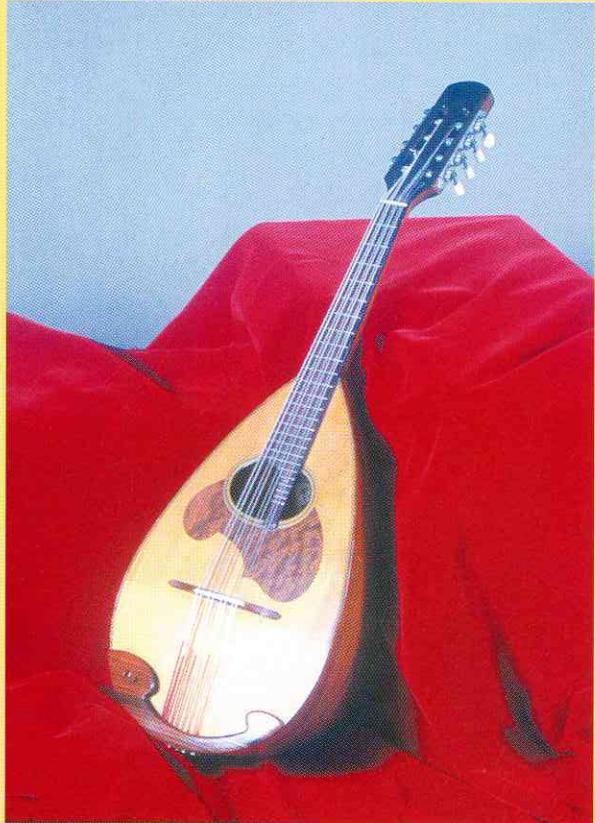


●17・18世紀のヨーロッパ、主にスペイン、フランス、イタリアなどで流行し、現存する絵画などからも当時のポピュラーな楽器であったことがわかります。弦は複弦5コースでおも
現在のギターより小ぶりの華奢な形です。
歌の伴奏にも独奏にも適し、どこへでも手軽に持ち運べて人気を集めました。

◀つのだかし氏 藏▶

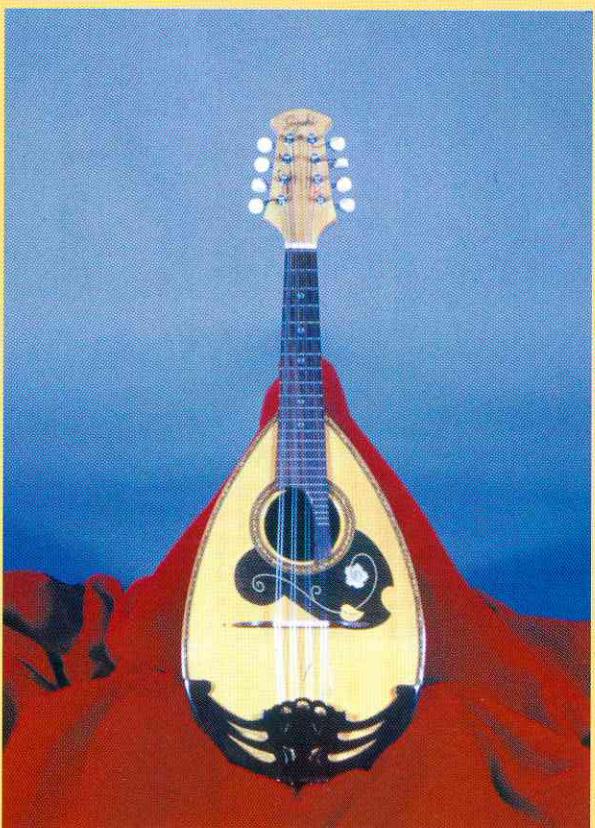
●11世紀頃から見られる楽器です。13世紀頃までジョングルール(吟遊樂人)により愛用されました。しかし、その後19世紀のはじめには使用されなくなりました。初期には4~5弦でしたが、14世紀のなかごろには複弦になりました。演奏にはピックが使われ、16世紀の終わり頃には指での演奏も行なわれました。マンドーラのなかでも小型のものはナポリ式と呼ばれます、現在のマンドリンの原型となった楽器です。

◀ 豊泉秀記氏 藏 ▶



●17世紀にイタリアで作られ、イタリアで大衆樂器として一般化されてヨーロッパ諸国やアメリカに広まりました。日本には1901年(明治34)に紹介されました。弦は金属製で複弦です。(4コース8本)ピックで演奏されます。

◀ 豊泉秀記氏 藏 ▶





●ギターという名称は、古代ギリシアの弦楽器キタラまでさかのぼることができます。今日のギターのように背面が平らでくびれを持つ胴の楽器は13、14世紀のスペイン、フランスのギターが最初と考えられています。現在のような形になったのは、18世紀の末ごろからです。

●日本には安土桃山時代にポルトガル人、スペイン人によりわずかに持ち込まれた後、明治時代から再び輸入され普及してきました。写真はクラシックギターです。

◀マリオ鈴木氏 藏▶



ギター
(スペイン)
uitar



●アメリカの代表的な弦楽器です。弦は5本が標準で、指かピックで演奏します。初期はフレットはありませんでしたが、現在はあります。バンジョーの胴の裏はふさいでいないので、音は共鳴しませんが軽快な音がします。17世紀頃アメリカで西アフリカ出身の黒人奴隸が使ったバンジョーと呼ぶ楽器から発達したものと言われています。

●ミンストレル・ショー(黒人の音楽、踊りなどを素材に白人の演じる演芸)などにも使われ、幕末の黒船来航のおりは船内で演奏され幕府の役人もその音を楽しみました。

◀ 国立音楽大学楽器学資料館 藏 ▶



バンジョー
(アメリカ)
anjo

●ハワイで生まれた4弦の弦楽器で、名前の由来はハワイ語でノミ(蚤)^{ノミ}が飛び跳ねる意味からきたという説があります。19世紀後半に渡来したポルトガルの民族楽器のマシートが定着したものと言われています。胴はハワイ産のコア材(ハワイアンコア)で作られています。

◀江田修氏 藏▶



ウクレレ
(ハワイ)



●1920年代から30年代にかけて、ギターに電気を利用する方法が研究されていました。ギブソン・アンド・リッケンバッカーという会社が、今までのギターに電磁再生装置をつけて、音を電気信号に変える発明をしました。電気信号は、アンプ(増幅器)を通って大きな音になります。これが、現在のエレキギターです。

◀宮崎昌美氏 藏▶



エレクトリック・ギター



楽器製作者の横顔

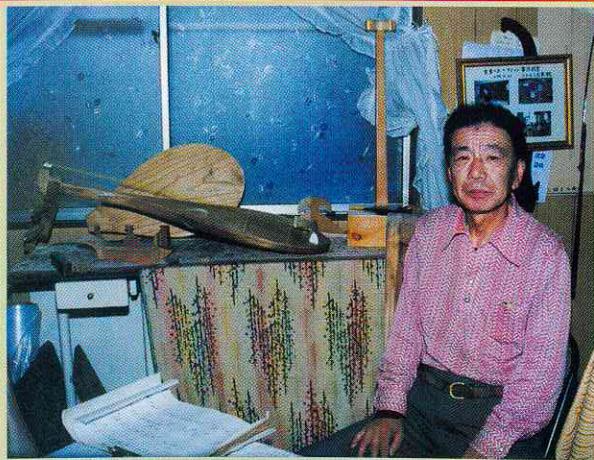
(舞い舞いホール展示)

●17歳よりギター製作の基本を荒井勝己氏に師事。自由学園卒業後、サントス・エルナンデス(スペイン・マドリッド)の工房にて一年、故フェリシアーノ・バリヨン氏に、楽器製作の心構えと、サントス・エルナンデスの特殊的技術(塗装、刀木の削り方)の指導を受け、その後工房の楽器製作を3本任される。1982年東京にて楽器製作を開始し、1990年山梨県白州町に工房を自力で建てはじめる。1995年白州町にて楽器製作を開始する。

●リュート製作をはじめたきっかけは「胴の丸みがどのように作られるのか」という好奇心と、リュートという楽器の持つ細工の美しさに引かれて」とおっしゃる山下氏。現在、氏は「歴史的楽器の再現」と現代の演奏家の希望を合わせ持つ楽器を仕上げることを目標に美しい自然の中で、製作を続けていらっしゃいます。

楽器製作をはじめて20年。氏の仕事はますます充実し円熟していきます。

リュート製作者 山下暁彦氏



薩摩琵琶製作者 中山 昇氏

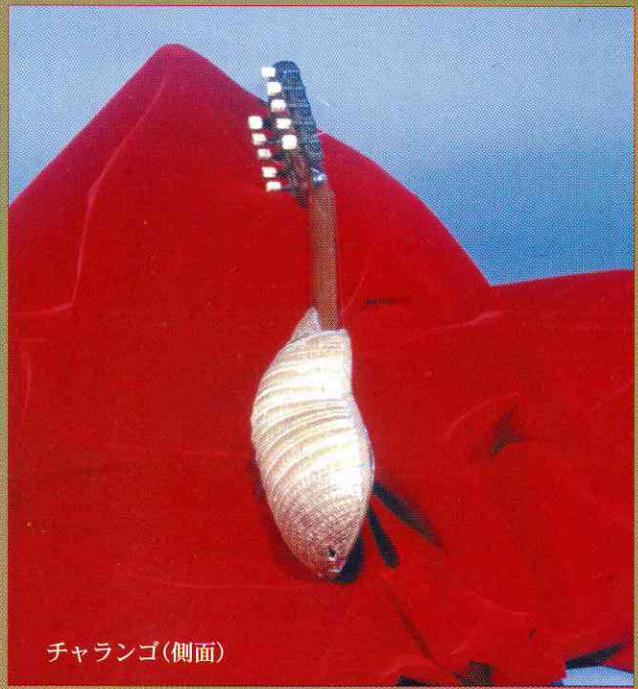
●1933年、長野県に生まれる。1958年に楽器職人の中出阪藏氏(ヴァイオリン・ギター製作家)のもとでギター作りを学び、1963年に独立する。琵琶製作は、すでに30年近くになり、古琵琶の修理や新規の製作など熟練した仕事をしている。中山氏の製作する弦楽器は、フラメンコギター、クラシックギター、ウクレレ、バラライカ、リュート、チャランゴなど多岐にわたるが、琵琶作りは自らの天職と位置づけ、また、現在は教育用の琵琶なども手がけている。

●越谷市の工房には製作途中の薩摩琵琶とともに、ヴィオラ・ダ・ガンバが飾られ、中山氏の製作楽器の幅の広さと深さを感じさせます。児童館で子供たちにウクレレ作りを指導するなど活躍の場はたいへん広い方です。気さくな笑顔のなかに楽器作りにかける情熱が感じられます。

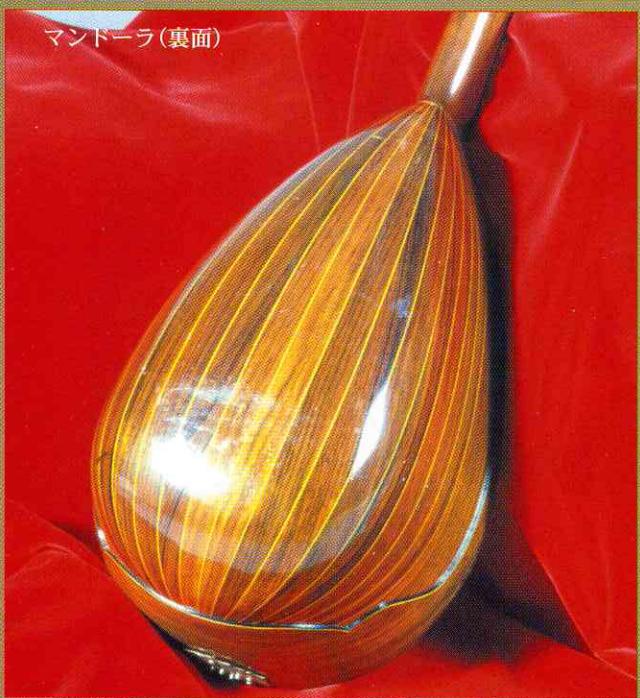
*ヴィオラ・ダ・ガンバはルネサンス・バロックの時代に愛された楽器



チャランゴ(正面)



チャランゴ(側面)



マンドーラ(裏面)



アーチリュート



筑前琵琶(ネック先端)

表紙の楽器

・トレブルリュート Treble lute

ヴァイオリン属にはサイズが小さくて音の高いヴァイオリンからヴィオラ、チェロのように同じ型で大きさと音の高さの異なるものがあります。リュートにも当時、高音のトレブルリュートから、アルト、テノール、ベースなど何種類かがありました。一般的に最も用いられたのはテノールリュートですが、このトレブルリュートは主に合奏などで使われていました。

つのだかし氏 藏

用語解説

【開放弦】弦楽器で左手が触れていない状態の弦のことです。

【義 甲】弦をかき鳴らすための道具（ブレクトラム）です。

【共鳴弦】弦に指等が触れて音が出るのではなく、他の弦の振動に共鳴して音が出る弦のことです。

【コース】弦の列のことで、1コースに2本張る「複弦」では、「6コース12本（弦）」と言います。

【複 弦】ユニゾン（同音）、またはオクターブに調弦された2本の弦を、一緒に弾くように間隔をせばめて張ったものです。2本一組で「コース」とよばれます。